

東京双松会会報

発行 東京都新宿区西新宿7-16-6 森正ビル 株式会社かもす内 東京双松会事務局
TEL:03-3361-4094 FAX:03-3361-6303 URL:http://www.tokyo-soshokai.org/
印刷 株式会社かもす

『東京から島根へのエール』

会長 芦田 昭充(第13期 昭和37年卒)

昨年6月に石倉義朗さんより、会長職をお引き受けし、1年が過ぎました。その間、島根県に関わる出来事がいろいろありましたので、この場をお借りして、何点かご報告させていただきます。

まず一つ目は、松江北高校の生徒会誌平成23年度51号に「卒業生の一人」として、私のことが紹介されました。同生徒会誌は、我々が在籍していた当時とは大きく様変わりし、今では大変立派な会報誌となっております。毎回、様々な業界で活躍している松江北高校出身者を紹介しているコーナーで、生徒会から、「ぜひ今回は芦田さんに登場いただきたい」と、彼らが独自に作った原稿が送られてきました。それには、よくぞここまで調べたな、と感心するほど私自身のことが詳細に描かれておりました。商船三井関連のホームページやメディアの記事を探して、それを基に原稿を作ってくれたようです。ただ、一部、補足が必要なところや、ややオーバーなところもありましたので、少しだけ加筆修正させていただきました。本人は、至って平凡な人間と思っておりますが、私の生き方が後輩の学生諸君にとって少しでも刺激になればと思い、面映ゆさを感じながらも記事にして頂いた次第です。

二つ目は、私が陸上競技部に在籍していたときの恩師、「大熊喜三郎先生」のご逝去です。私の母の四十九日の法要のため、6月10日(日)に大東町へ帰郷したのですが、前日の土曜に、先生がご逝去され同じ6月10日(日)にご葬儀が執り行われると、田舎から連絡が入りました。母の法要は午前中でしたので、午後からの先生のご葬儀に参列することができ、出雲市の葬儀所で最後のお別れをして参りました。先生のご葬儀は「神式」で、中央に小さな社が設営され、その両端に幟が立てられておりました。仏式ですと「仏」になりますが、先生は「大熊喜三郎の尊」という神様になられました。陸上競技部時代、先生は細かいことは一切言わず、大きな方向性だけを示される、非常に鷹揚な指導をされる方でした。現在の私の根幹部分は、少なからず、その時代に形成されたのではないかと考えてお

さて、3つ目は「出雲大社遷宮」の件です。昨年、発足した出雲大社御遷宮奉賛会会長にはトヨタ自動車の奥田相談役、副会長には日本経団連副会長の錚々たるメンバー10数名が就任し、私もその末席に名を連ねておりますことは前回報告の通りですが、その奉賛会が去る7月11日(水)に東京で開催されました。出雲大社は、今年3月上旬をもって御本殿の大屋根葺き替えが完成し、現在はその御本殿を覆っていた「素屋根」の解体工事が進む中、新しい檜皮によって葺き替えられた御本殿大屋根が陽の光を浴びてあたたかも黄金色の如くに輝き渡っているとのこと。更に、今年10月10日より東京国立博物館で、企画展「出雲・聖地の至宝」が開催され、この企画展と併せ「たたらシンポジウム」も開催される予定です。

最後に、わが陸上競技部後輩の活躍について紹介させていただきます。一人は現役高校3年生の金森和貴君で、中国高校選手権100mで10秒64のタイムで優勝し、インターハイでの優勝も期待される有望な後輩です。そして、もう一人は北高OGの荒井(旧姓辰巳)悦加さんと、日本選手権の3000m障害で、第一人者である早狩選手を抑えて見事優勝しました。しかし、五輪参加標準記録Bには届かず惜しくもロンドン五輪出場を逃しましたが、長年の高い壁であった早狩さんを抑えたことは称賛に値するものと大変感動いたしました。

このように、島根に関わるイベントが続々と開催され、そしてスポーツでも活躍する人が増えていくことは大変喜ばしいことです。ぜひ東京在住の双松会会員の皆様方にも、これらイベントに積極的にご参加いただき、共に東京から島根を応援いただければ幸いです。

(株式会社 商船三井 会長)



平成23年度総会報告

厳しい夏もようやく過ぎ初秋のさわやかな空気に包まれた平成23年10月1日(土)、市ヶ谷のアルカディア(私学会館)で第56回総会と懇親会が開催された。昭和20年卒業の大先輩から若きは平成23年卒業の学生の皆さんまで100名以上の参加のもと、母校からは校長先生と校内幹事の先生また双松会と近畿双松会からも来賓を迎え盛会となった。

石倉義朗前会長(昭30年卒)の名司会で始まった総会ではまず、新会長の芦田昭充さん(昭37年卒)が挨拶され、その中で会長は、野球と陸上競技漬けの学生時代を振り返ったあと、本会の会長を務めることによってふるさと鳥根とのつながりが更に深まることを確信しており、40年以上にわたり一企業人として愚直に生きて来た過程で得た経験・知見を最大限に発揮して本会の発展に尽くしたいとの抱負を述べられた。

次に勝部昌幸校長先生(昭45年卒)は、東日本大震災をはじめとする最近の自然災害を見るにつけ生徒諸君の安全対策がいかに大切か、また普通の生活がいかに尊いかを思い知らされたとの話に続けて、スポーツ・文化活動両面にわたる母校生徒の活躍の様子を詳しく報告された。

続いて双松会の庄司肇会長(昭35年卒)からは、母校のシンボルである二本松の1本が枯れてきたので残っている新芽を育てて植え替えることになったこと、校内にある起雲閣(同窓会館)の資料整理を進める中で二葉亭四迷が本校で学んだ頃の資料が発見されたこと、小泉八雲、若槻禮次郎、岸清一等に関する貴重な資料を陳列しているので帰省の際は是非立ち寄って欲しいとの話があった。

更に近畿双松会の押田良樹会長(昭35年卒)からは、本会へのエールとともにお互いに切磋琢磨しながら双松会の発展に貢献したいとの話に続き、同じく昭和35年卒業の藤川秀之さんの紹介があった。藤川さんは挿絵画家として活躍されており、本人も登壇されて最近の創作活動と作品の披露があった。

その後、泉宏佳事務局長(昭38年卒)による活動報告、前島紀夫会計担当(昭38年卒)による会計報告、鳥村武直監事(昭38年卒)による監査報告があり満場一致で承認された。

プログラムは順調に進行し、恒例の「部活動の思い出」は「野球部」。登壇したのは平成14年の選抜高校野球大会で「2

1世紀枠」に選ばれ甲子園で活躍した楠井一騰さん(平15年卒)と室本剛政さん(平16年卒)の二人で、万雷の拍手で迎えられた。21世紀枠は秋季県大会ベスト8以上のチームの中から、困難を克服し他校や地域により影響を与えている学校が選ばれるとのことで、わが母校は限られた時間を有効に使う文武両道の精神が模範になるとして推薦されたものの。初戦の相手は4年連続出場の強豪福井商業で、負けはしたものの攻守ともに互角に渡り合い、無失策の鉄壁な守備や2死走者なしから2点を返した9回の攻撃は一生忘れられないと、二人は当時の模様を熱く語っておられた。母校卒業後は、大学は異なるものの二人とも東京6大学の野球部に所属して神宮球場でプレーし、今では夫々社会の第一線で活躍されている。

総会に続く懇親会は、野球部OBで昭和20年代後半に活躍された奥田雅重さん(昭31年卒)による乾杯の音頭で始まり、途中音楽家の大岩誓子さん(昭42年卒の大岩篤郎さんのご夫人)の歌の披露などもあって終始和やかな雰囲気の中で進行した。最後は恒例により、旧制中学組のリードで「赤山健児」を、また女性チームのリードで「山脈浮かびて」を全員で合唱し、次回の再会を誓いつつお開きとなった。



思い出を熱く語る楠井一騰さんと室本剛政さん



女性チームのリードで「山脈浮かびて」を合唱

寄稿

— 野崎(旧姓小山)保(第16期 昭和40年卒) —

『私の3.11』

私の時代の松江北高はまだ西川津のボロ校舎でした。大学は島大で、22歳の春までは松江で過ごしました。就職先は東京に本社をおく地質コンサルタント会社でしたが、1969年に新卒として新潟に赴任。以来、おもに大ダム建設のための調査に従事することになりました。若い頃は、あのハッ場(やんば)ダムの調査にも通いました。しかし、2004年の新潟県中越地震以来、災害調査が本業となり四川大地震の調査にも二度にわたって出かけました。

3.11震災の際には、もはや出番はないものとあきらめていましたが、どうしても現場を見ておきたいという思いに駆られ、昨年9月、車で被災地に出かけました。福島県ではダムが破壊され、7名の命が奪われました。これはダム技術者にとっては、どうしても見逃せない災害でした。この現場を皮切りに白河市郊外の地すべり被災地にも立ち寄りました。ここでも13名の犠牲者が出ています。さらに相馬市の沿岸へと向かい、そのまま北上して岩手県の宮古市まで津波災害の跡をたどりました。行けども行けども、かつてそこに人々の生活があったとは思えない光景が広がり、直に見た被災地は想像を絶するものでした。あの「吉里吉里村」では防潮堤の上に立って沖合を眺め、湾の入口に津波が見えてからでも十分に逃げられたはずと思うと、犠牲者の無念の思いが伝わってくる気がしました。この大津波は想定外とよく言われましたが、そうではなかったのです。残念ながらわが国では地質学者の社会的地位が低く、億万年いや千年単位の話でさえ「地質屋のたわごと」と軽視されがちです。原発から出る放射性廃棄物の問題もしかり、これは掛け値なく万年単位の問題として取り組まなければなりません。



こんなに高くまで



大槌町役場

被災された人々の壮絶な生き様にも接しました。石巻市の友人は津波に妹さんを奪われ、ご自分の仕事場も一階は破壊され、近所の方々には二階の住まいを提供し、私の友人でもある大阪市大の原口教授等と共に、津波災害の調査にも従事されたと聞きました。

気仙沼市の大谷海岸は風光明媚なところで、そこでは道の駅の駅長・米倉兵一さんに現場を案内して頂き、そのうえ震災時の体験も語って頂きました。その場はお礼を申し上げてお別れしましたが、この方の実直なご性格に強く惹かれるものがありました。

たまたま私は、今住んでいる川崎市幸区の区民館で企画されている一般市民対象の防災に関する講習会の委員をお引き受けしており、米倉さんをお呼びするよう、提案しました。市からは旅費も謝礼もほとんど出ないということでしたが、ご本人に私の思いを手紙と電話でお伝えしたところ、米倉さんからは「被災者としての体験を多くの人に伝えていくのが私の使命」というご返事を頂き、胸の熱くなる思いがいたしました。その思いが市の幹部にも伝わったようで、今年3月、区民館での講習会が実現しました。

こうした講習会に対する一般市民の関心は低く、特に地盤災害への問題意識は非常に低いことを思い知らされました。私にも講演者としての機会を与えて頂きましたが、今後も私の知識・経験を地道にお伝えし、余生を災害対策のアドバイザーとして貢献できればと願っております。

のぎきたもつ プロフィール: 島根大学卒業。
地質コンサルタント会社に勤め、ダム建設のための調査に従事。最近はおもに災害調査を担当。

ふるさと巡りIN東京

近代スポーツの父 岸清一

ロンドン五輪でヒートアップした2012年、そして2年後の2014年に開催される「FIFAワールドカップブラジル大会」への出場権をかけて、アジア最終予選突破を目指す日本にとって、忘れてはならない人がある。しかもその人は、わが松江北高(松江中)の大先輩だ。"近代スポーツの父"として慕われた、岸清一氏のことである。

氏は、松江市雑賀町の生まれ。雑賀小学校、島根県第一中学校(現在の松江北高)、大学予備門を経て、東京帝国大学法科大学英法科に進学、のちに弁護士となり、民事訴訟においては"当代の第一人者"といわれ、東京弁護士会会長を務めるなど、法曹界の重鎮として活躍された。

しかし一方で、氏は日本スポーツ界の発展に尽くした人物として知られている。東京帝国大学在学中には漕艇選手として活躍し、1920年、「日本漕艇協会(日本ボート協会)」の初代会長に就任している。

1921年(大正10年)、嘉納治五郎氏のあとを受けて「大日本体育協会」(日本体育協会)の第2代会長となったあと、その3年



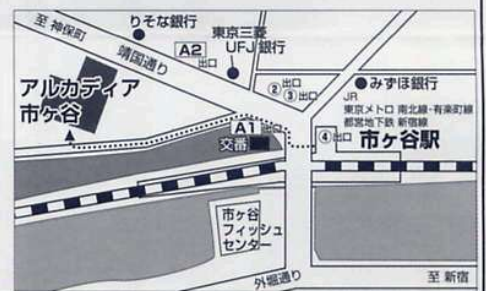
後には国際オリンピック委員会(IOC)委員に就任し、死去するまで日本側のIOC委員を務めている。そして5年のちの1929年、大日本蹴球協会(のちのJFA)の、国際サッカー連盟(FIFA)加盟にも尽力した方である。

その功績をたたえて、松江市の島根県庁前には銅像があり、1964年の除幕式には当時のアベリー・ブランデーIOC会長が参列し、「東京オリンピックの開催は、岸の偉業である」と、讃辞を述べたという。

もともと「岸記念体育館」は御茶の水にあり、アマチュアスポーツの大本山としての役割を果たしてきた。その後オリンピック東京大会の開催を機に、渋谷区神南1丁目の地に新「岸記念体育館」が建設された。体育館の前で、にこやかに微笑んでいる「岸清一博士胸像」にお目にかかることができる。この体育館の資料室には、第18回オリンピック東京大会や過去のオリンピック大会、ユニバーシアード大会の報告書、日本のアマチュアスポーツ全般にわたる様々なデータがそろっている。アマチュアスポーツに思いを馳せ、足を運んでみては、いかがだろうか。

＝平成24年度 総会開催のご案内＝

1. 日 時 / 平成24年9月30日(日) 12:00～15:30
2. 会 場 / アルカディア市ヶ谷(私学会館)
東京都千代田区九段北4-2-25
TEL.03-3261-9921(代表)
3. 会 費 / 8,000円(学生無料)
4. 申込〆切 / 平成24年9月7日(金)



編集後記

今年は古事記が編纂されてから1300年、それを記念して「よみがえる はじまりの物語 神話博しまね」が7月21日から11月11日の日程で開催され、出雲大社周辺を主会場に県下各地でイベントが繰り広げられています。6月に出雲大社を訪れた頃は、一畑電車駅前の神門通りは道路や駐車場の整備でごった返していました。最近パワースポット巡りや縁結びで若い女性の来県も増えているようですが、日本の始まりを語る神話の世界にも触れて欲しいものです。会報3号をお届けします。貴重な会費の中から発行費用を捻出していますので、是非年会費の納入をお願いします。(T.M)